

## 『容齋隨筆』に見る表現形式

——読者との係わりの中で——

大西陽子

本稿の主旨は『容齋隨筆』<sup>(1)</sup>の特徴を表現形式という観点から考察することにある。南宋の洪邁の著作『容齋隨筆』は宋代以降急激に盛行した夥しい隨筆筆記類の一であるが、書名に〈隨筆〉と冠するものとしては恐らく最初のものであろう。彼はその名の由来を以下のように述べる。

予老い去りて懶に習れ、書を読むこと多からざれども、意の之く所は隨ひて即ち紀錄す。因りてその後先は、復た詮次無し。故に之を目して隨筆と曰ふ。

とは『一筆』自序の件<sup>くだり</sup>であり、有名な『徒然草』の序段を想起させるほどに似かよった口吻となっている。隨筆文学と言えば、わが国の『枕草子』を嚆矢として『徒然草』により繼承発展したような、作者の体験、見聞などを通じた観想を随意に表白した作品に思い至る。事実『容齋隨筆』はその名から想像されるように、形式的には相互に関連性のない独立した小論が無作為に排列され集大成された作品なのではあるが、しかし内容面ではそれらとはかなり異なった要素をもっている。では一体『容齋隨筆』は如何なる書物であり、洪邁は何故〈隨筆〉という断り書きのうえで執筆したの

であろうか。それには先ず〈随筆〉のジャンルとしての特性を明らかにしておく必要がある。

〈随筆筆記類〉は伝統的には〈説部書〉〈筆記〉などと称され、宋代、とりわけ南宋期に夥しく輩出するようになるジャンルである。その盛衰の沿革の様相は、言うまでもなく類似した要素を含む〈詩話〉と軌を一にしている。このような形態の散文作品が南宋に多出する外因として、文章の荷い手である作者と読者層の両者の急増を認める必要がある。印刷技術の発達や、古文運動、口語文による平明な文章の波及が、それらを可能ならしめたであろうことは想像に難くない。更にはこのような諸要因が相俟って、士大夫は競って博覧強記を誇り、その博識が従来の経学を超えた幅広い分野に目を向けさせるという時代背景を生み出したことも重要な一因であろう。〈随筆筆記類〉は、表現形式の上では一則一則が短く完結しているため、読者が自らの興味に即して、時間の制約を受けずに知識や教養を受容できる。なによりもこのような表現形式が読者層としての南宋の士大夫の感性をくすぐったのであろう。そして自由な表現形式と多彩な範疇の内容を許容する故に、多くの読書人が読者に甘んじておらずに作者になろうと欲したのであろうと考えられる。

だが〈随筆筆記類〉は、その受容の広範さと表裏をなして、一定した評価を得にくい程に玉石混淆の作品群である。そのため、〈随筆筆記類〉は一括して総称することも、数項目に分類することにも極めて困難を伴う。例えば『四庫全書総目提要』では、およそ史部雜家類、子部雜家類、小説家類などに収められているが、各種の目録相互間で、同一の書物が四部分類を異にする例も稀ではない。いずれにしても伝統的な四部分類による学問体系から見れば、取るに足らない属ということになりそうであるが、『提要』では更に細部に分類され、そこに内容の相違、ひいては評価の基準の差異を設けていたようである。子部では雜学、雜考、雜説、雜品、雜纂、雜編之属と六分類されている。如何なる位置づけが為されているかは、それぞれの叙に端的に表明されていると言えよう。『容齋隨筆』の属する〈雜考之属〉の叙

は以下のものである。

経義を考証するの書は……(略)……宋に至りて容齋隨筆の類、動もすれば巨帙を成し、其の説大抵経史子集を兼ね論じ、以て一類に限る可からず。是れ真に議官より出づるの雜家なり。

議官は『漢書』藝文志に「雜家者流、蓋出於議官」と見え、同書の「小説家者流、蓋出於稗官」を考え合わせれば、比較的評価されていることがわかる。そして〈雜説之屬〉の叙「興の至る所即ち編を成すべし。故に宋自り以来作者夥しきに至る。今総じて之を彙めて一類を為す。」に比すれば、より一層好対照を成しているよう。

『容齋隨筆』に関してはと言うと、叙にも明記されることからわかるように、〈説部書〉としてはかなり高く評価されている。「南宋の説部、終に當に此を以て首と為すべし。」(『容齋隨筆提要』)とまで見做されている程である。考証の学を宗とする四庫館臣にとってみれば、その議論の精確さは他の雜家類と混同するわけにはいかないと考えられたのであろう。

以上のように『提要』を一瞥すると、『容齋隨筆』は確かに高く評価されているのだが、それは〈説部書〉に於ては、という括弧つきであることを見のがすわけにはいかない。このような〈隨筆筆記類〉に対する一般的な評価は、洪邁自身にとっても充分念頭に置かれていたことであろう。書名を〈隨筆〉としながらも、〈隨筆〉にも見るべきものはあると自負と、世間の觀念を自著によって払拭せんと意気ごみがあったであろうことを以下順を追って述べていきたい。

## 二

『容齋隨筆』は五筆より成る。孝宗の隆興元年(一一六三年)洪邁四十一歳の年より十八年に亘る長き歲月を費やして、淳熙七年に『一筆』が完成し、以下各々十六卷から成る『四筆』までと、途中已むなく筆を絶つことになる『五

筆』十巻が刊行されている。その執筆過程は時を追うに従って速まり、『四筆』成立にはわずか一年をも費やされていない。婺州で刻された『一筆』が孝宗の御覽に与り、「なかなか上手い議論を展開している。（嗚有好議論）」という御墨付きを得たことに誇りを抱き、自らは采るに足らない書と卑下しながらも（『二筆』自序）、執筆継続に尽力したものとされる。

洪邁はその晩年を『夷堅志』編纂と『容齋隨筆』著述にほぼ終始する。同時平行にこの全く性質を異にする大著に従事していくのであるが、それぞれの執筆意図には明確な相違が見られる。『容齋四筆』に以下のようにある。

曩さきに越府より帰り、外事を謝絶するも、独り弄筆紀述の習ひ掃除すべからず。故に異聞を搜采し、但だ夷堅志に緒つづす。議論雌黃に於ては復た閑抱せず。

〈議論雌黃〉とは『容齋隨筆』を示唆しており、その内容が經史の詮議や詩文の校訂であることを意味している。それに対し『夷堅志』は伝聞などに依拠するものであるとしている。この言述を額面通り受け取れば、洪邁の旺盛な執筆意欲はもっぱら『夷堅志』の方に注がれていたようである。『四筆』自序は更に続く。

しかしながら幼い子供穰（未詳）が『夷堅志』の原稿が書きあげられるたびごとに「隨筆と夷堅志はどちらもお父さんが平素から嗜んでいたものでしょう。今隨筆を書き続けられないのだったら一方がおろそかになってしまうことになりません。」と言って毎日机の傍に立って、必ず一枚草稿が出来るのを待って退散する。その気持ちに背くことを憚って、思いつくことを集めて書き記した。（而稚子穰、每見夷堅滿紙、輒曰、隨筆、夷堅、皆大人素所游戲。今隨筆不加益、不應厚於彼而薄於此也。日日立案旁、必俟草一則乃退。重逆其意、則哀所憶而書之。）

これでは宛かも子供が催促するから書いたのだと言わんばかりの体裁をとっている。だが実際それほど『容齋隨筆』執筆に気が進まなかったのであろうか。

『容齋隨筆』が〈議論雌黃〉を一貫した執筆態度として保持する限り、著述には広範な読書と綿密な分析による判断を必要とする。それは資料が次々に人から提供されて話題に事欠かない『夷堅志』に比べて、自らの手で書物を渉猟し素材を探す作業のみに係ってくるのであるから、より自身の主体的な取り組み姿勢と時間を要するといえよう。この両者は同様に後半になるにつれて執筆期間が短縮しているが、書物の性質上の相違を考慮すると、両書に対する洪邁の傾倒の比重は一概に扱うわけにはいかず、『四筆』自序で述べている以上に『隨筆』執筆には意が注がれていたと言えよう。

また『三筆』自序でも「思いつくことを書き述べて、併せて王羲之の秀でた品格を表明し、晉史の妄説を打破して、子供たちに教示する。どうか四筆を書いて後日の良い話としたい。(據寫所懷、并發逸少之孤標、破晉史之妄、以詔兒姪、冀爲四筆他日嘉話)」と子供のために記述するのだと断り書きしている。このような子孫や後輩に示すという形式は、古くは『顔氏家訓』の「故に此の二十篇を留めて、以て汝が曹の後車と爲すのみ」などの六朝の家訓に見られる。議論の材料となる書物に家蔵書が頻出することをも考慮に入れると、事によると『容齋隨筆』自体が『顔氏家訓』に倣った洪氏一門の家訓を意識していたのかも知れない。しかし真に家訓のつもりであるよりは、子孫に示すという体裁のポーズを通して、多数の読者に読まれることを意図したものであろうことは後に再びとりあげる。

以上処々に引用した『一筆』から『四筆』までの序は、いずれもその執筆意欲、議論に対する自負に引き換え、謙遜と弁解めいたポーズであると思倣して良さそうである。だが、序がポーズであるのは『容齋隨筆』に特有なものと言えらるるのであろうか。〈序〉はそもそも書物の特長や作者の思想を知らしめるのに読者を導く解題的役割を果たしている。そのためしばしば自らの哲学や学問観を大上段に論じたり、或いは暗に仄めかされていたりして、作者の本旨が集約されて表出するものである。ところが、〈隨筆筆記類〉の序では自著が遊戯として位置づけられ、ポーズと見受けられる

ものが少なくない。それは作者の主體的な意義づけであるというよりは、むしろ外的要因である〈随筆〉という表現形式が半ば強要する形でポーズを設けざるを得ないのであるだろうか。先行する〈随筆筆記類〉を例にとってみると、沈括『夢溪筆談』では「意味もなく並べた言葉とおとりただければ結構です。（以予爲無意於言可也）」と述べ、呉曾『能改齋漫錄』では「胸中にある万巻の書物によって、筆のすさびとして文章を物し、集輯してこの書を作ったのである。（以胸中萬卷之書、游戲筆端、哀爲此集）」と但書している。雑多な小論の集大成である〈随筆〉は、その無秩序さから読者に無目的な著作ともとられかねない。そのため作者はこのような表現形式で書くことの名目上の意義づけを〈序〉という場を借りて読者に対して施したくなるのではないかと考えられる。『容齋隨筆』の序の体裁も、一貫して洪邁の執筆意図がポーズの中に隠蔽されていると言えよう。

三

では一体何を記述せんがために、洪邁は〈随筆〉という表現形式を選ばなければならなかったのだろうか。『容齋隨筆』に織りこまれていた内容は、史実の記載の審議や詩文評論、言語観、典故の考拠などが顕著で、極めて多岐にわたる論及が成されている。その議論は分析批評であるよりは指摘に近く、また『四庫提要』に指摘されるように「少しく牴牾あるを免れない」ということはあるが、常に実証的態度で臨んでいる。洪邁の学問に対する峻厳な態度は、史官の一家に生まれることにも起因しているよう。

洪邁は皓の第三子として生まれる。洪父子四人はいずれも文章によって盛名を轟かせた学者一門である。适、遵、邁の三兄弟はそろって紹興十二年（一一四二年）の博学宏詞科に挑み、邁のみ黜けられるが、次回三年後の紹興十五年（一一四五年）には優秀な成績で登第する。その博洽ぶりは「幼くして書を読むこと日に千言を数ふ。一たび目を過ぐれば

輒ち忘れず。博く載籍を極め、稗官虞初、積老傍行と雖も涉獵せざる靡<sup>な</sup>し。『宋史』卷三七三 洪邁伝と称される。二兄を良き競争相手とした刻苦勉励と、豊富な家蔵書が手伝つてのことであろう。『容齋隨筆』を一読すれば、彼の多岐に亘る讀書範圍には驚嘆せざるを得ない。こうした際限なき多読が背景にあつてこそ、文章に対する冷徹な審美眼が培われたのであろう。

彼は若くして国史院編修官を兼任し、淳熙十三年には『九朝国史』通修を上奏するなど、歴史書編纂に奮ならぬ意欲を示すが、彼の書物・伝聞に求める第一条件は〈史官〉の目を通して見る信憑性すなわち事実であつた。この姿勢は『夷堅志』で真正面から語られるが、『容齋隨筆』に於てもまた然りである。無節操に書物を漁るわけではない。「俗間に伝ふる所の浅妄の書、所謂雲仙散録、老杜事実、開元天宝遺事の属、皆絶<sup>はな</sup>だ笑ふ可し。」(『一筆』卷一 浅妄書)「野史雑説多く之を伝聞及び好事者の縁飾に得る有り。故に類多く実を失ふ。前輩と雖も免るる能はず、而して士大夫頗る之を信ず。」(『一筆』卷四 野史不可信)という明確な見解を持ちながらも、同時に「雑説、瑣説、家傳<sup>あ</sup>豈<sup>た</sup>尽く廃す可けん也。」(『四筆』卷十一 冊府元龜)と言う。ここに矛盾があるのではなく、咀嚼して始めて信じられないものを退けるという実事求是の姿勢の現われなのである。彼の事実への探究心は尽きることがない。〈信以傳信、疑以傳疑〉の精神から『一筆』で「賞魚袋という言葉は理解できない。他の箇所では見あたらないのである。」と記述したのを、『四筆』で明文を発見したと補記するなどはその一例であろう。真実の追求は厭くことなき読書によってこそ報いられるという確信が、恐らくは彼の胸中にあつたのではないだろうか。彼の追求は近時の書物に対して殊に緻密であり、『資治通鑑』に記載されていない記事を挙例して慨嘆したり、『夢溪筆談』の誤りを論駁しているなどの点は興味深い。他者への抗弁には自己に対する厳密さが要求されるはずであり、裏返せばそこに洪邁の秘やかな自負を垣間見ることができよう。

では一体、洪邁はこれらの議論を如何なる表現によって読者に提示しているのか。『容齋隨筆』の小論の表現形式を

考察していく前に、通常の理解とは逆になるが、洪邁の文章観を一瞥しておきたい。

文章は一小伎、道に於ては未だ尊しと為さず、と杜子美激して云ふ有りと雖も、然れども要は失言たり。以て訓ず可からず。文章は豈小事ならん哉。(『一筆』卷十六 文章小伎)

彼の文章表現に関する言述には自信の程が窺える。それは「此れ韓・柳文を為るの旨なり。要かならず学者宜しく之を思ふべし。」(『一筆』卷七 韓柳為文之旨)「其れ文を論ずる者是の如し。後学宜しく之を志すべし。」(『一筆』卷七 李習之論文)と訓示するような筆致で文章論を展開していることにも表明されている。そしてその文章観は、文章を構成する一字一句にまで厳密さを要求している。「漢書用字」「周礼奇字」「六経用字」「公羊用豊語」等々、用字用句法は小論の重要な題材として取り上げられている。例えば『二筆』卷五の「杜詩用字」では律詩に用いる自、相、共、独、誰などの字が実字であることを指摘し、杜甫が自と相、自と独・共、独と相の字をそれぞれで使用していることを具体例を列挙して実証している。經書史書に関する語句を拾集した彼の著述は『經子法語』『春秋左伝法語』や『史記法語』から『唐書精語』まであり、彼が如何に文章を熟読吟味した上で綿密に考察しているかを裏づけていよう。このように語句の使用の微妙な違いによって文章にどのような作用を及ぼすか、そして文章全体の中でどのように読む者に印象づけるか、という微視的かつ巨視的な視点を相互に行き来させながら詩文を認識しているのである。

洪邁は文章に対しては簡潔性、論理性を追求する。文章は古来『典論』論文や『顔氏家訓』などによって論議されてきたが、洪邁の生きた南宋は、既に古文運動が〈唐宋八家文〉を手本としなければならぬほどに爛熟し、スローガンであった簡古な〈古文〉は次第に形骸化してくる頃である。話本や平話などの白話の出現も反映してか、詩文は冗長なものが多くなる。洪邁はこのような時代風潮に抵抗し、あくまで本来の簡古な〈古文〉を模範とすることを主張する。

『隨筆』中に見る蘇軾、韓愈らの文章への傾倒、伝聞録である『夷堅志』を、『太平広記』を意識してのことでもある。



うが、文言で収録するなどが一証となる。『容齋隨筆』は文章論に多くの紙枚が費やされ、文章は簡要でなければならぬことが力説されている。彼にとつての文章の必要最低条件は、読者に煩雜さを感じさせないことである。

私の郷里の士人は一たび多くの大夫や小さな郡守の行状を作ると九千言。衢州の士人は参内して上書するのに二万言。読む者にどうしてうんざりさせずにおかれようか。文を作る者はこれを戒めるのがよい。(予郷士作一列大夫小郡守行狀九千言。衢州士人詣闕上書二萬言。使讀之者豈不厭倦。作文者宜戒之。『四筆』卷二 志文不可冗)

私が張文潛の説を見たところ、尽く蘇東坡の緒論に基づいている。それなのに千言の煩わしさは三百言の簡潔さに及ばないのである。そこで審らかに記述して、文を作り説を立てる者に見習うところを知らしめたのである。(予

觀文潛之說、盡祖蘇公之緒論、而千言之煩、不若三百言之簡也。故詳書之、俾作文立說者知所矜式。『五筆』卷四 東坡文章不可學)

このように、主旨を同じくするならば文章は簡潔を良しとする。まさしく晋の陸機『文賦』の「辭は達して理拳がるを要す。故に冗長なるを取ること無し。」に相当しよう。「辭達而已矣」は『論語』衛靈公が典拠となっているが、しかし〈達〉するためには単に短ければよいというのではない。「夫れ文は達するを貴ぶのみ。繁と省とは各々当たる有り。」(『一筆』卷一 文煩簡有当)と言い、そこで『前漢書』は『史記』から二十三字省いたが、『史記』の素朴で興趣深いには及ばないと具体例を提示している。煩簡を単に表面的な数字上の問題に附してはいないのである。

また次のような一則がある。洪邁は『史記』を読んでいつも「魏世家」、「蘇秦伝」、「平原君伝」、「魯仲連伝」のところに来るたびに、驚嘆して小躍り(驚呼擊節)しないことはなかったが、その理由はわからずにいた。「魏世家」では十数字の間に魏の字が五度使用されていることや、三つの列伝で同じ記事が反復されていることが益々文の勢いを高揚させていることを理解し、初めて「天下の至文」と称される所以に首肯するのである。(『五筆』卷五 史記簡妙處<sup>(2)</sup>こ

ここに史官としても文学者としても司馬遷を信奉せずにはいられなかったであろうはずの洪邁の冷徹な批評眼を推し測ることが出来る。洪邁の文章観は、自身の先入観にとらわれずに作品そのものの文章を洞察するという一貫した姿勢にこそ面目躍如たるところがあるのである。

予謂へらく、秦の事は穀梁紆余にして味有り、邾の事は左氏語簡にして切たり。文を為り事を記さんと欲する者、当に是を以て之を觀るべし。〔『一筆』卷三 三伝記事〕

文士文を為るに、矜誇にして実を過ぐる有るは、韓文公と雖も免るる能はず。〔『一筆』卷四 為文矜誇過実〕  
このような文章に則して表現の特徴を洞察していく姿勢があるからこそ、限定されない幅広い読書を自ら求め、真偽を見極め、文章を議論できるといふ自負を抱くにまで至ったのである。

更に文章表現を内容的に充実させ、より文学性を加味している要素として興味深い示唆がある。

列子の事を書く、簡勁にして宏妙。多くは莊子の右に出づ。……（引用文略）……此の一段の語を見るに、宛転四反し、数百言もて之を曲げて暢ぶるに非ざれば了ふる能はず。而して潔淨粹白なること此の如し。後人の筆力、渠んぞ復た到る可けんや。〔『二筆』卷十二 列子書事〕

儒者を自認しながら他の諸子の書にも価値を見出す洪邁らしく、列子の文章をも文学的に評価している点もさることながら、〈宛転〉即ち変化の使い方によって文章に内容上からも妙味が加わると感じている。〈宛転〉は洪邁にとってはほとんどテクニカル・タームであると言つてよい。他にも「大率唐人詩に工なること多し。小説・戯劇、鬼物・仮託と雖も宛転して思致有らざる莫し。必ずしも顯門の名家にして後称す可きにはあらざるなり。」〔『一筆』卷十五 唐詩人有名不顕者〕などと絶讚する評語として数度使用されている。〈宛転〉のもたらす効果が分析的に言及されているわけではないが、恐らくは詩文に緊迫感を与え、読者に平板に感じさせないために不可欠な要素であることを熟知しての発言である

う。彼が如何に詩文を読者との係わりの中で認識していたかは「讀此詩文數篇、眞能使人方寸超然、意氣橫出」「讀之使人悽然」などのように「讀之使人」（読者に感じさせる）という表現法が多用されていることから窺われよう。以上のように洪邁の文章觀を概観すると、簡潔かつ論理的で内容的に変化に富んだ文章こそ優れた興趣があるということになる。これはほぼ散文を対象としてきたものであるが、詩にあてはめてみると、まさしく絶句の真髓「語少なくて意足り、無窮の味有り」（『一筆』卷一 古行宮詩）に合致する。とすれば、彼が『万首唐人絶句』を編集する心積もりになったのも、こうした文章觀あつてのことかも知れない。

#### 四

それでは、洪邁のかくまで明解な文章觀は、自身の文章作成にあつてどの程度反映されているのであろうか。

『容齋隨筆』の文章は読了後極めて痛快感を覚えさせるものがある。それは文章の歯切れの良さ、とりわけ結句の簡潔性が文章全体を引き締め、余韻を醸し出していると思われる。彼の文章の真髓は結句にこそ集約されていると言っても過言ではない。小論一則一則の結句には、断定的とも言える口調の簡潔な句が使用されている。中でも極めて頻出する結句としては「可惜也」「可笑也」があり、他に「可見（睹）」「可證」「可嘆」「可恨」「可議」「可稱」「可怪」「可信」「可不戒」「不然」「不侔」「不可曉」「不應爾」「悲（哀）哉」「信哉」「相類」「非也」「誤也」「失之」等々枚挙に暇がないが、これらの表現はかなりパターン化された形式であることがわかる。そしてそのうち大半が作者自身の感情表現となっている。これほどに短くなくとも、「不可同日語」「其論最爲至當」「如此者甚多」「大哉言也」「皆佳句也」などといった類で、また激切な口吻を以て結ばれている。

洪邁が結句を意識的に簡潔化していることは、彼自身の文章で明確に論じていることから看取できる。

『老子道德経』孔徳之容の一章は、その末句で「……以此」と言っている。二字を用いて結びとしているようだ。『左伝』と『孟子』の二書の用例は何十何百という語が反復されているが、しかしただ「使如之」と「今若此」というそれぞれ三字によって結句としている。『史記』封禪書の記事は全部で数十件、三千語である。しかしながらその末尾には「然其效可睹矣」と言っている。そこで武帝が築き上げてきたものが、皆でたためというところで片づけられてしまうことは、一々論ずるまでもない。文章の結句の簡妙さはここに極まっている。(老子道德孔徳之容一章、其末云、……(略)……以此。蓋用二字結之。左傳……、孟子載……、此二事反復數十百語、而但以使如之及今若此各三字結之。史記封禪書載……凡數十事、三千言、而其末云然其效可睹矣。則武帝所興爲者、皆墮誕罔中、不待一二論說也。文字結尾之簡妙至此。『二筆』卷九 文字結尾)

小論一則一則に簡潔性、論理性を追求すれば、自ずとそこに自身の観念的な言述が介入する余地が少なくなる。そのため作者の感情表出は結句にこそ集約される。そして文章が小気味よくまとめられ、読者に鮮烈に印象づけることに効を奏するのである。

彼の文章は結句に関しては終始簡潔さを失っていない。しかしながら、一則全体の文章となると結句ほどに簡潔性が徹底されていない。『二筆』後半辺りから、〈宛転〉とも相入れない形で顕著に一則の文章が冗長になってきているのである。それは先述した執筆過程と密接に関連するのであろう。『随筆』の題材が湧出し、執筆意欲が増大してきたため、文章表現に固執するより記述することが優先されてしまったのであろうか。時には内容上やむを得ず、或いは推敲不足のまま、次第に自らの文章観と乖離して行くことが多くなるのであろう。

そして、文章が冗長になるのとはほぼ同時平行に、極めて特徴的な表現が見られるようになる。先刻、〈序〉にポーズが設けられていることを指摘した。それと同様なポーズが、小論一則一則についても執拗に設けられるようになるので

ある。それは『三筆』『四筆』へと移行するにつれて次第に増加しており、冗長な文章と思われるような一則には、必ずといってよいほどパターン化されて設けられている。

ここで述べるポーズとは、表現の仕方に多少の差異こそあれ、 $\text{A} \cdots \text{A} \cdots \text{A}$ 、聊紀於此、以示 $\cdots \text{B} \cdots \text{B}$ と、既に『三筆』序に見たような形式を意味している。 $\text{A}$ には一則を設けて論述することの理由もしくは言訳が述べられ、 $\text{B}$ には洪邁が仮定する読者、或いは期待する効果（例えば「以稗圖志之缺」「庶幾或有助於瘍醫」「益廣其傳」）などが挿入される。

$\text{A}$ には「後世に伝わらないのが惜しまれるから」「感動したから」「まだ記憶していたから」「偶然見聞する機会を得たから」「人（子孫）が尋ねてくるから」という類の断り書きが為されている。そしてこのようなポーズの設置される小論の内容は、1、今（稀にしか）知られていない事柄や文章について、2、類似する例の列挙、3、作者が感銘を受けた事件や人物、詩文について、4、作者にとって不可解な事柄について、5、周知の事実を改めて記述する場合などに類型化できる。これらのポーズの意味あい、1・4（3が該当する場合もある）に関しては読者へのメッセージ的要素が多分に含まれているが、2・3・5では、自身の感性が依り処となっていたり、長々と類例が羅列されていたり、経史の沿革のような基礎的な事柄が述べられているため、読者への或いは作者自身への弁解としての方便として存在しているにすぎない。

$\text{B}$ の仮定した読者としては、子孫、児輩、未来者、学者、好事家、博雅者、同志などで表現されており、また「自戒」として自らを読者に設定している場合もある。しかしこれらの仮の読者像は、自身と子孫の名を明記する場合を除いては、具体的なイメージに結びつかない。つまりは、後世に至ってまでも『随筆』が読まれることを期待しつつ、現在書物を手に行っている読み手に二人称的に呼びかけていると見做しても不当ではあるまい。「但だ以て子孫甥姪に伝示

するのみ。外人の為に道ふに足らざる也。」(『三筆』巻八 吾家四六)と但書したり、まして記録する必要のない実の子孫や自己を讀者に仮定することは、逆に言えば益々多数の讀者を意識した言述と見るより他ない。

このような形式で一則一則にポーズを設ける例は『東坡志林』にも見られ、決して『容齋隨筆』に特異な形式とまでは言えないかも知れないが、後半にはほぼパターン化されており、しかも一則の最初にポーズを設置してから論を展開する場合も出てくることなどから考えると、かなり意識的にその効果を利用するようになるのではないかと思われる。

ではポーズの設置はどのような作用をもたらすのであろうか。最大の作用は、〈序〉に設けられたポーズにしても同様であるが、作者の立場をニュートラルにしてしまうことにある。即ち本論中に作者が執筆理由を述べる形で顔を出し、しかもその理由を自らの意志によるのではないかのように外的要因に依拠してしまうことによって、作者は小論の荷い手としてよりもむしろ対極に位置する讀者側に一步近づくことになるのである。まして〈自戒〉というポーズを置く場合などは、作者自身でありながら同時に讀者の立場をも共有するという図式になる。このように作者が作者と讀者の境界を浮遊できる中間的立場に位置するということは、作者自身にとっては放胆に論述できることになり、讀者側にとってみれば、作者の不在感から、眼前に対峙する作者という壁が崩壊し作品に感情移入しやすくなるが、代わりに作者の素顔が見えにくくもなるのである。〈序〉のポーズと異なる点は、小論自体が匿名化され、作者のアイデンティティーが極端に微弱化することである。それは必ずしもプラス面に作用するわけではない。小論の文章表現が作者にとって不本意であることを讀者に暴露しているに等しいからである。

では洪邁自身がポーズの作用をどこまで認識した上で用いたのかは別として、何故ポーズを必要としたのであろうか。それは、自身の文章観と小論の文章との乖離からくる照れ隠しとも考えられる。だがそれだけでは自身の内面に於ける問題であり、讀者をこれほどに意識する理由に薄弱である。やはりその裏には、文章表現に固執する以上に、自己

の主張を読者に対して鼓吹したいという欲求が湧出してきたことがあるのではないだろうか。

洪邁は本質的には宋人一般の士大夫と同様に饒舌であったのであろう。『夷堅志』にしる『容齋隨筆』にしる、尠大な数の短篇集である。それは彼が小論一則一則を簡潔にするのに尽力するあまりに、反動として自ずと量的に饒舌になった結果の現われであるかも知れない。そして彼の饒舌は小論に課した自らの条件である表現形式の上で破綻を来たすようになる。その自己矛盾を緩和するのがポーズである。ポーズを設置すれば、自己の学説を誇示して憚る必要はなくなる。そこで作者の壇上を降りてでも、ポーズの効果を意図的に利用するようになったのだと思われる。

## 結 び

『容齋隨筆』の表現形式は以上見てきたような特徴をもっている。そしてそれは洪邁の文章観が機軸となっていると結論づけた。となれば、結果的には自らの理想とする文章表現とはくい違つてはくるものの、何故洪邁がこれほどまでに『隨筆』の文章に厳密を期そうとしたのかという疑問が残る。結論だけ言えば、彼にとっては、正統的でない〈隨筆〉という表現形式を用いた以上、自己の学問を本領發揮するためにも、議論を徹底させ、文章に厳密さを要求するより他なかつたのであろう。その結果、文章により内容により『隨筆』が遊戯でないことを読者に納得させようと焦つたあまりに表現の上で破綻をきたしてしまったのかも知れない。

このように見てくると『容齋隨筆』は洪邁にとつては決して完成作であつたとは言ひ切れまい。しかし後世『容齋隨筆』が如何に広く読まれたかは、明代では積稜宏『竹窓隨筆』、朱国禎『湧幢小品』、張習孔『雲谷臥余』といった『容齋隨筆』に体を做つたと思われる作品が産み出されていることなどからも窺知できよう。

注

(1) 本稿では便宜上『容齋隨筆』以下『五筆』までを総称する場合、『容齋隨筆』もしくは『隨筆』とし、出典を提示する場合は漢数字をあてることにする。

(2) 田中謙二「史記における表現の反復」(『東方学報』第二十七冊)に、表現の反復が司馬遷の意識的な修辭的技巧であり、洪邁の指摘が当を得たものであることが論及されている。